

国吉城址の石垣探訪地図



〔舞鶴若狭自動車道〕美浜ICより車で5分
〔JR〕小浜線美浜駅より徒歩25分、車で10分



- 国吉城歴史資料館
- Ⅱ類石垣(木村期)
- Ⅲ類石垣(京極期)
- 自然岩盤取り込み
- 崩落石垣、未調査石垣
- 佐柿町奉行所石垣(廃城後、江戸期)
- I類石垣(粟屋末期)

※①～⑪は石垣写真(3頁)に対応。

国吉城に関するお問い合わせは…

美浜町教育委員会事務局教育政策課 若狭国吉城歴史資料館
〒919-1132 福井県三方郡美浜町佐柿25-2 TEL: 0770-32-0050 FAX: 0770-32-0057

【令和2年3月 3刷発行】

続日本100名城

若狭国三方郡佐柿

国吉城址の石垣

福井県 美浜町教育委員会

し続け、難攻不落の国吉城と勝久の勇名を轟かせました。その活躍は、軍記『国吉籠城記』諸本に記されています。

元亀元年(一五七〇)四月、織田信長が国吉城に入り、最初の朝倉氏攻めに向かいました。天正元年八月、敦賀で朝倉勢を追う織田勢に合流した勝久は、朝倉氏の滅亡を見届けました。

天正十年(一五八二)、信長の後継をめぐる羽柴秀吉と柴田勝家の対立では秀吉方に与し、柴田領である越前国境に接する国吉城を改修しました。戦後、大坂に召し出されて秀吉の直臣になりました。替わって、木村常陸介定光が豊臣大名として領主となり、城と城下を整備しました。その後、若狭国主となった諸大名は、領国東方の重要拠点として重臣を配しました。

寛永十一年(一六三四)、京極家の後に徳川譜代の酒井忠勝が小浜に入封すると、翌年に佐柿町奉行所と御茶屋屋敷が造られ、廃されました。

現在の国吉城址

国吉城址は、山城部本丸跡から山麓の城主居館跡にかけての約五万六千㎡が、昭和五十八年(一九八三)に町史跡に指定されています。平成二十九年(二〇一七)四月には、公益財団法人日本城郭協会より続日本百名城に選定されました(No. 一三九 佐柿国吉城)。

四方に延びる尾根上に曲輪が展開する山城部(詰の城)は、標高一九七・三mの城山最高所を本丸とし、北西尾根筋上に五段(Ⅱ郭Ⅴ郭)の曲輪が連なります(連郭曲輪群)。西に

派生する尾根上には、高土塁と喰違虎口を有する「二ノ丸」と伝わる曲輪があります。
城山山麓には、削平地群が段々に広がり、城主居館や家臣の屋敷地と伝わります。西の谷は「青蓮寺谷」と呼ばれ、かつて青蓮寺が所在したといわれます。青蓮寺は廃城後、小浜藩主酒井忠勝により寛永十二年(一六三五)に佐柿町奉行所の南(現在地)へ移されました。
城山の北は、機織池が天然の水堀となっていました。干拓により消滅しました。

国吉城址の発掘調査と石垣の発見

美浜町では、町史跡国吉城址を調査し、史跡公園として保存整備して活用を図ることを目的に、平成十二年(二〇〇〇)から第一次調査を開始しました。以降、同二十八年度までに十七次に渡る調査を実施していますが、調査前には想像もなかった発見が相次いでいます。

調査前は、『国吉籠城記』諸本に記されたイメージと、厚く堆積した土砂に覆われた土造りの城跡を彷彿とさせる状況から、朝倉勢の猛攻を撃退し続けた戦国期山城が現存していると考えられてきました。

- ・ 整然と並んだ大規模礎石建物群
- ・ 山麓から山麓の各曲輪を固め、段々状に築かれた石垣
- ・ 自然岩盤を取り込むなど、地形の制約を受ける曲輪と直線的な曲輪
- ・ 遠方から運ばれ、山城部本丸北西虎口に配された巨大な礎石と鏡石
- ・ 本丸最高所の台上に建つ礎石建物の痕跡(天守か)
- ・ 石垣は一様に上半分を崩し、下半分を埋めていた
- ・ 山麓から山麓まで出土遺物多数、ただし瓦は限定的(ほぼ皆無)

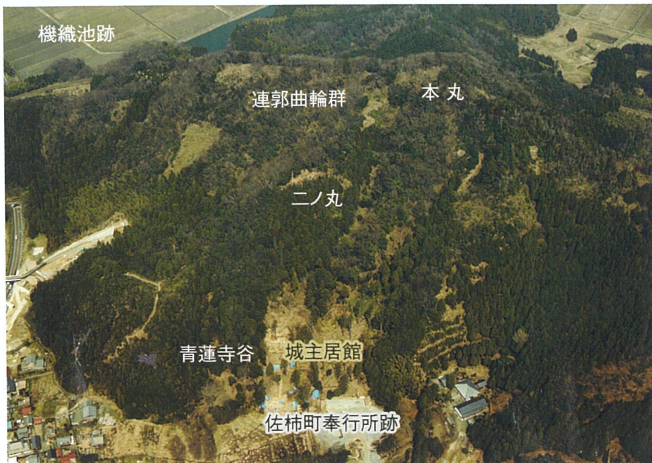
など、戦国期山城の一言では片付けられない遺構や遺物の数々が発見され、国吉城のイメージを大きく覆すこととなりました。

その中でも、各所で発見された石垣は特徴的で、現在、一部は露出展示しています。山城部では、本丸の北西虎口や東虎口、外周部の崩落石垣、北面堀切や帯曲輪段の段石垣などと、連郭曲輪群では、主にⅡ郭、Ⅲ郭で石垣が確認されています。山麓の城主居館跡では、大規模な礎石建物群が確認さ

国吉城の歴史

国吉城は、若狭国守護大名武田氏の重臣、粟屋越中守勝久が、古城跡を利用して築城したといわれ、弘治二年(一五五六)には居城としていました。

永禄六年(一五六三)九月、敦賀郡司朝倉太郎左衛門率いる越前勢が攻め寄せました。以後、天正元年(一五七三)に朝倉氏が滅亡するまで、ほぼ毎年侵攻してくる越前勢を撃退



国吉城址空撮(南より)

国吉城址の石垣分類



①本丸東虎口前東西石垣



②本丸下北堀切石垣（北面）



③本丸下北堀切石垣（南面）



④本丸下帯曲輪段上段石垣

I 類石垣

人頭大の不定形石材を築石に用いたもの。転用石を含む。自然岩盤を取り込む。裏込石量少ない。
I 期（栗屋末期？）：賤ヶ岳の合戦（天正11・1583）時の若狭口の備えか。



⑤本丸北西虎口石垣（左）と北側石垣面の倒れた鏡石（右）



⑦連郭曲輪群Ⅲ郭南面石垣



⑥本丸北西帯曲輪段下段石垣
（上は④上段石垣）



⑧城主居館跡二段目南面石垣



⑨城主居館跡二段目西面石垣



⑩城主居館跡最下段南面石垣

II 類石垣

築石は人頭大の横長石が主。築石を横長に置き、奥行は短い。横目地が通り、鏡石、転用石を含む。裏込石量少ない。
II 期（木村期）：大普請で豊臣政権下の拠点城郭化された国吉城、主郭部の総石垣化。



⑪城主居館跡最下段南面張出石垣（右）と西南隅の算木積み（左）



III 類石垣

巨大な横長の築石を奥行き長く積む。隅角部は割石を用いた「算木積み」。裏込石量多い。
III 期（京極期）：城主居館跡正面（大手）を改修、石垣上に瓦葺建物。



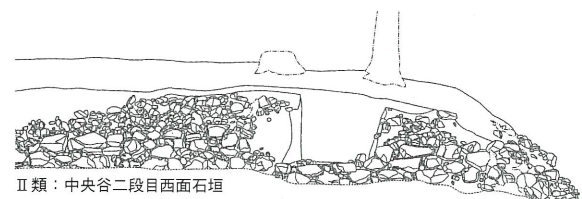
佐柿町奉行所石垣



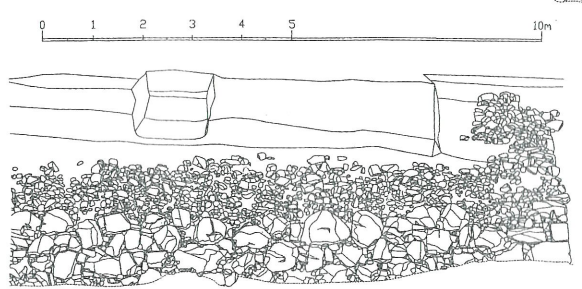
准藩土屋敷跡石垣

国吉廃城後に築かれた石垣（江戸期）

佐柿町奉行所石垣：寛永12年（1635）新築。国吉城の築石を再利用。
准藩土屋敷石垣：慶応年間（1865～1868）新築。



II 類：中央谷二段目西面石垣



III 類：中央谷最下段南面張出石垣

城主居館跡出土石垣比較図（同一縮尺）

れた中央谷三段目から下の最下段にかけて、各段外周に石垣が確認されています（四頁地図参照）。
今後も、地図に示した以外の石垣が発見される可能性は十分にあります。

【四】国吉城址の石垣の特徴

発掘された石垣は全て、いわゆる「野面積み」と呼ばれる、自然石を未加工のまま積み上げたものです。ただし、その特徴を観察すると、使われる築石の大きさや積み方等によって、三種に分類できることに気付きます。

I 類：人頭大の不定形石材を築石に用いたもの。転用石を含む。自然岩盤を取り込む。裏込石量少ない。
例：本丸東虎口前東西石垣、本丸下帯曲輪上段石垣、本丸下北堀切

II 類：築石は人頭大の横長石が主。築石を横長に置き、奥行は短い。横目地が通り、鏡石、転用石を含む。裏込石量少ない。
例：本丸北西虎口、本丸下帯曲輪段下段石垣、城主居館跡石垣

III 類：巨大な横長の築石を奥行き長く積む。隅角部は割石を用いた「算木積み」。裏込石量多い。
例：城主居館跡最下段南面張出石垣

I 類石垣は大小様々な築石を、II 類石垣は意識的に横長石を築石に使用している特徴を除けば、構築技法に大きな差異はありませんが、I 類は自然岩盤を取り込むなど、地形の機微を活かした構築であるのに対し、II 類は直線的で、地形を改変する人工的な構築といえます。III 類石垣もまた直線的ですが、築石の大きさや裏込石層の量、一部加工石を用いる点で大きな違いがあります。

また、各類石垣の確認範囲にも著しい偏りがあります。つまり、I 類は山城部本丸跡周辺でのみ確認、II 類は山上から山麓の主要部一帯に及んでいます。III 類は、山麓部城主居館跡最下段南面でのみ確認できました。

以上のような石垣構築技法の変化と分布状況から、石垣の築造は I 類→II 類→III 類と行われた可能性が考えられ、国吉城の歴史と合わせてみていくと、概ねの年代観も与えることが出来そうです。

【五】国吉城址の石垣の年代観

I 類石垣とII 類石垣では、共存する遺物の年代観がほぼ同一時期（十六世紀後半～末）でしたが、II 類は、豊臣政権下で唯一の大名領主であり、領国統治の拠点城郭として、その地位にふさわしい大普請を行える立場にあった木村常陸介によるものと判断して差し支えないと思われます。

I 類を栗屋期の痕跡とみるか、木村期改修の一部とみるかは判断が難しいところですが、当時の若狭国を治めた織田家重臣の丹羽長秀が、勝久らに城の修築を急がせた書状が残されています（天正十年十月二十一日付丹羽長秀書状）。本能寺の変後の織田家臣団の分裂で、長秀は羽柴秀吉陣営に属し、越前の柴田勝家と国境を接する若狭東部は最前線でした。長秀は当時、北近江に出陣しており、若狭国に留まる勝久は対越前の備えを固める必要がありました。実際、先の書状では普請の遅れを指摘していることから、勝久はすでに普請に着手していたと推測されます。ただ、半年後には柴田勝家の自刃で対越前戦は終結し、直後に勝久も国吉城を退去したため、工事は未完に終わった可能性が高く、本丸周辺の一部に留まる I 類をその痕跡と考えてもよいのではないのでしょうか。

III 類石垣は、共に出土した瓦片の中に、関ヶ原の合戦後に若狭国主となった京極高次が築城を始めた小浜城と同汎の軒丸瓦片があったこと、割石を用いた算木積み技法が導入されていることから、京極期の拡張と考えるのが妥当と思われる。

I 期：栗屋末期（一五八二～一五八三）…I 類石垣
賤ヶ岳の合戦（天正十一・一五八三）時の若狭口の備えか
II 期：木村期（一五八三～一五八六）…II 類石垣
大普請で豊臣政権下の拠点城郭化された国吉城、総石垣化
III 期：京極期（一六〇一～一六三四？）…III 類石垣
城主居館跡正面（大手）を改修、石垣上に瓦葺建物

【六】石垣から見てくる国吉城

難攻不落を誇った国吉城は、発掘調査の結果、土造りの戦国期山城の様相を留めるといふ想像を覆し、山上から山麓まで、主要部はほぼ全面石垣化されていたことが明らかになりました。特に、山上から山麓まで分布する II 類石垣は、城全体を石垣化する事ができる程の城主（大名）の権威、北西虎口の鏡石に代表される巨石を山上まで運ばせる程の力を誇示する象徴に他なりません。これは、城の存在意義が、戦いのためから領内統治、大名権力の象徴に変化したことを物語るものです。そして、それが出来たのは、歴代城主中唯一の豊臣政権下の大名領主である豊臣大名の木村常陸介だけです。なぜなら、他の城主・城代たちは独立大名ではなく、若狭国を治める大名の家臣に過ぎず、個々で本城クラスの城を築く力にはなかったでしょう。ただし、軍記『国吉籠城記』諸本や『佐柿町初覚』には、常陸介が佐柿城下の整備に力を注いだことは伝えていますが、城の普請を行ったことは触れていません。国吉城の石垣は、記録には残されなかった歴史の真実を明らかにしたのです。

そして、その象徴的な石垣が、山上から山麓まで全く同じように破壊されていたことがまた注目されます。つまり、上半分を崩して下半分を埋めて痕跡を消すという壊し方は、ある時期に同じ手で一斉に破壊されたことを物語っています。国吉城が城としての役割を終えた事を示す痕跡です。そしてそれは、城跡の地形すら大きく変えてしまう規模でした。これらの破壊は、国吉城を廃して佐柿町奉行所を置いた江戸時代の小浜藩主、譜代大名酒井氏によるものでしょう。

発掘調査で出土した石垣は、これまで知られていなかった国吉城の姿や、伝えられてこなかった歴史を教えてくださいました。しかし、城山全体から見れば、調査した範囲はわずかです。今後の調査で、また新たな、想像もしなかった発見があるかもしれません。（了）

- 【引用参考文献】
- ・『佐柿国吉城址を歩こう～見どころ編～』佐柿国吉城ブックレット 国吉城の章第1巻 2007 美浜町教育委員会
 - ・『国吉城址史跡調査報告書 I』2011 美浜町教育委員会
 - ・大野康弘「若狭国吉城～発掘15年の成果から～」『第32回全国城郭研究者セミナー資料』2015 中世城郭研究会
 - ・大野康弘「若狭・越前地方の城郭石垣～発掘調査事例を中心に～」『織豊城郭 第16号』2016 織豊期城郭研究会
 - ・大野康弘「16 国吉城」『織豊系城郭とは何か～その成果と課題～』2017 城郭談話会